



日本語学習者の会話における「文末表現」の研究

木曾，美耶子

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2014-03-25

(Date of Publication)

2015-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6017号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006017>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

日本語学習者の会話における「文末表現」の研究

氏 名 : 木曾 美耶子

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名	(主) 實平 雅夫	教授
	(副) 鈴木 義和	教授
	(副) リチャード ハリソン	教授

要旨

本研究では、終助詞をはじめとする文末部分は会話の「好感度」や「会話全体の印象」に関わるという立場のもと、学習者が使用する「文末表現」を研究の対象項目とし、以下、四つの研究課題を設定した。なお、調査の対象者は、「外国語環境」で学ぶ学習者の一例として、中国内陸部の S 大学で日本語を専門に学ぶ学習者とした。

〔研究課題 1〕学習者の会話における「文末表現」の使用実態とその特徴を明らかにする。

〔研究課題 2〕母語話者が学習者の会話を聞いた際、どのような「文末表現」を誤用だと感じるのかを明らかにする。

〔研究課題 3〕母語話者が学習者の会話を聞いた際、どのような「文末表現」に対してマイナス印象を感じるのかを明らかにする。

〔研究課題 4〕「文末表現」の誤用とマイナス印象の関わりについて明らかにする。

本研究は、第 2 章から第 6 章までの本論、序論にあたる第 1 章と結論にあたる第 7 章を含め、七つの章から構成されている。そのうち、第 3 章から第 6 章までは、アンケート調査、会話の録音・分析、フォローアップインタビュー、母語話者評価を用いた実証研究で、質的な分析を中心に、一部量的な分析を加えている。

第 1 章では、本研究の背景として、日本語教育の立場による「文末表現」の研究の必要性と本研究の立場と意義について述べた。

第 2 章では、研究を行うにあたり、本研究の枠組みについて述べた。まず、発話文を「相づち的発話」と「実質的発話」の二つに分けた。「相づち的発話」は、「感動詞のみの発話（「です」等の助動詞や終助詞の付加が可能になるものを除く）、笑い声」が、「実質的発話」は「相づち的発話」を除いた発話文がそれぞれ含まれる。これらの発話文のうち、本研究では「実質的発話」を研究の対象とする。「文末表現」は、丁寧体の言い切り表現の A 型、丁寧体＋終助詞の B 型、丁寧体＋「けど」、「けれど」、「けれども」、「が」、「から」、「ので」、「し」の C 型、普通体の言い切り表現の D 型、普通体＋終助詞の E 型、普通体＋「けど」、「けれど」、「けれども」、「が」、「から」、「ので」、「し」の F 型、中途終了型の G 型に分類した。C 型、F 型、G 型にさらに終助詞が共起したものは、それぞれ C+型、F+型、G+型とした。また、「実質的発話文」が持つ発話機能にも注目し、ザトラウスキー（1993、1997）を参考に発話機能を 1.〈事実情報要求〉、2.〈意見・感情要求〉、3.〈確認・同意要求〉、4.〈共同行為要求〉、5.〈単独行為要求〉、

(注) 4, 000 字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

6.<言い直し要求>、7.<事実情報提供>、8.<意見・感情提示>、9.<意志表示>、10.<言い直し>、11.<受容>に分類した。11.<受容>は、さらに a.【肯定・承認】、b.【理解】、c.【同意】、d.【否定】、e.【不理解】、f.【不同意】、g.【心的態度】、h.【自己注目】に下位分類した。

第3章では、「文末表現」の調査を行ううえで、「外国語環境」の日本語教育の現状を把握することを目的に、中国 S 大学にてアンケート調査を実施した。153 名の学習者から得られた回答を分析したところ、学習意識に関しては、入学当初は日本・日本語に興味がなかった学習者の意識変化、「話す力」の需要の高さが明らかになった。日本語の接触については、日本のドラマ・映画・アニメ等の映像メディアに対する関心の高さ、実際に日本語に接する機会や経験の個人差が示された。また、学習方法については、会話の授業において学習者の発話量やアクティビティが少ないという問題点及び web 教材の利用やインターネットを活用した交流による学習の可能性について言及した。

第4章では、[研究課題 1]を明らかにするために、第3章で実施したアンケートの回答者 153 名の中から、来日経験がないこと、日本語能力試験 N1 に合格していること、大学卒業後も日本や日本語関係の就職や進学を希望していることを条件に 16 名を被調査者 (CN) として選出した。そして、CN と筆者である母語話者 (JP) の初対面における会話の録音と CN に対するフォローアップインタビューを行った。CN による 1656 の発話文及び JP による 1770 の発話文を分析したところ、①CN が使用する「文末表現」の型は A 型・D 型が多く、一部の CN を除き使用上の大きな個人差は見られなかったこと、②B 型の疑問の終助詞「か」や「省略」の意味での G 型は意識的に使用している一方で、A 型及び D 型は無意識的に使用していること、③A 型を除く「文末表現」の型の使用は、映像メディアの影響が強いことが明らかになった。また、一部の CN から B 型・E 型の終助詞や D 型の使用に母語の影響に関わる回答が得られた。

第5章と第6章では、[研究課題 2]～[研究課題 4]を明らかにするために、CN の「文末表現」に対する母語話者評価を実施した。母語話者評価は、「誤用評価」と「印象評価」の二つに分けられる。6 名の母語話者が第4章で収集した会話データを聞き、「誤用評価」と「印象評価」それぞれに対して、「無記入」、「1」、「2」の3段階で評定する方法を採った。

第5章では、①「誤用評価」と「印象評価」の得点の相関関係、②訂正すべき誤用だと感じられる表現の要因と特徴を検討した。調査・分析の結果、以下の点が明らかになった。

①「誤用評価」と「印象評価」の得点の相関関係：「誤用評価」と「印象評価」の結果に対して相関分析を行ったところ、両者の得点には相関が認められなかった ($\gamma = .20, p < .01$)。

②訂正すべき誤用だと感じられる表現の要因と特徴：母語話者のフォローアップインタビューの内容をもとに質的に分析した。その結果、評価者が誤用であると評価した要因を、i「語彙の選択」、ii「接続」、iii「時制・アスペクト」、iv「助詞」、v「文脈と表現のずれ」、vi「活用」、vii「語順」、viii「複合型」の八つに分類することができた。「複合型」とは、二つ以上の要因が組み合わさったものである。その中で、8 点～6 点といった高い誤用評価が付けられた要因は、i「語彙の選択」、ii「接続」、v「文脈と表現のずれ」だった。「助詞」や「語順」等、本研究における「文末表現」の枠組みから外れる指摘も多く、母語話者の「文末表現」の捉え方がより広範囲であることがうかがえた。

第6章では、①マイナス印象を抱く表現の要因と特徴、②「誤用評価」と「印象評価」の要因の関わりについて検討した。調査・分析の結果、以下の点が明らかになった。

①マイナス印象を抱く表現の要因と特徴：母語話者のフォローアップインタビューの内容をもとに質的に分析した。その結果、評価者がマイナス印象を抱いた要因を、I「丁寧さの欠如」、II「文脈と表現のずれ」、III「意味のわかりにくさ」、IV「複合型」の四つに分類することができた。この中で、最もマイナス印象が抱かれる要因は、「丁寧さの欠如」だった。「イントネーションの不自然さ」に関する指摘は「複合型」に見られたものの、少数であった。さらに、各要因における表現の例を精査し提示した。

②「誤用評価」と「印象評価」の要因の関わり：「誤用評価」、「印象評価」共に、「文脈と表現のずれ」が要因として指摘される結果となった。特に、終助詞は発話文全体を最終的に決定付けるため、誤用や不使用による違和感があつた場合は、マイナス印象に直結しやすいことがうかがえる。また、「印象評価」の要因 I「丁寧さの欠如」に関しては、スピーチレベルが下がる語の使用に留意が必要である。要因 III「意味のわかりにくさ」によるマイナス印象は、「語彙の選択」、「接続」、「語順」の誤用と繋がりがあつた。「語の選択」は自動詞・他動詞の誤用、「接続」は「と思う」等の引用表現の不使用、「語順」は規範文法から逸脱したことで、主語・目的語・述語が不明瞭になり、そのことがマイナス印象に繋がった。第5章及び第6章の結果から、「文末表現」の誤用とマイナス印象との関連性は低いものの、評価者は「誤用評価」においても「印象評価」においても「文脈と表現のずれ」に注目する傾向があることがわかった。また、「丁寧さの欠如」

や「意味のわかりにくさ」に繋がる誤用の特徴も確認できた。

第7章では、各章のまとめ、日本語教育の現場への提言、今後の課題を述べた。

本研究では、「終助詞等の文末表現を間違えると相手に不快な印象を与える」と先行研究で指摘されつつも、これらの指摘は研究者の言語感覚に頼っているのが現状である中で、新たな試みとして母語話者評価を取り入れ、誤用だと捉えやすい表現やマイナス印象を抱かれやすい表現を明示した。これらの結果を踏まえ、今後さらに研究を重ねることで、学習者が目標とする日本語能力や運用場面、今置かれている発話場面に合わせて学習者自身が表現形式を取捨選択できるような「自立学習を目指した日本語教育」の発展に貢献していきたい。

論文審査の結果の要旨

氏 名	木曾 美耶子	
論 文 題 目	日本語学習者の会話における「文末表現」の研究	
要 旨		
本論文は、終助詞をはじめとする文末部分が会話の好感度や会話全体の印象に関わるという立場に立ち、日本語学習者が使用する文末表現を研究の対象項目とし、学習者の会話における文末表現の使用実態とその特徴、母語話者が学習者の会話を聞いた際、どのような文末表現を誤用だと感じるのか、母語話者が学習者の会話を聞いた際、どのような文末表現に対してマイナス印象を感じるのか、そして、文末表現の誤用とマイナス印象の関わり、について明らかにすることを目的としたものである。全体は、7章から構成されている。 第1章「序論」では、本研究の背景として、日本語教育の立場による文末表現の研究の必要性和本研究の立場と意義について示されている。 第2章「理論的背景と定義」では、まず、発話文を相づち的発話と実質的発話の二つに分け、後者を取り上げることを示した上で、文末表現は、丁寧体の言い切り表現のA型、丁寧体+終助詞のB型、丁寧体+「けど」「けれど」「けれども」「が」「から」「ので」「し」のC型、普通体の言い切り表現のD型、普通体+終助詞のE型、普通体+「けど」「けれど」「けれども」「が」「から」「ので」「し」のF型、中途終了型のG型に分類し、C型、F型、G型にさらに終助詞が共起したものは、それぞれC+型、F+型、G+型とすることが示されている。次に、実質的発話文が持つ発話機能について検討し、事実情報要求、意見・感情要求、確認・同意要求、共同行為要求、単独行為要求、言い直し要求、事実情報提供、意見・感情提示、意志表示、言い直し、受容に分類し、受容をさらに肯定・承認、理解、同意、否定、不理解、不同意、心的態度、自己注目に下位分類することが示されている。 第3章「調査Ⅰ：中国の大学における日本語教育の現状」では、文末表現の調査を行う上で、外国語環境の日本語教育の現状を把握することを目的として、中国の大学において実施したアンケート調査の分析から、学習意識に関しては、入学当初は日本・日本語に興味がなかった学習者の意識変化、話す力の需要の高さを、日本語の接触については、日本のドラマ・映画・アニメ等の映像メディアに対する関心の高さ、実際に日本語に接する機会や経験の個人差を、そして、学習方法については、会話の授業において学習者の発話量やアクティビティが少ないという問題点及びweb教材の利用やインターネットを活用した交流による学習の可能性が、それぞれ明らかにされている。 第4章「調査Ⅱ：学習者の会話内における『文末表現』」では、学習者の会話における文末表現の使用実態とその特徴を明らかにするために、第3章で実施したアンケートの回答者の中から、来日経験がないこと、日本語能力試験N1に合格していること、大学卒業後も日本や日本語関係の就職や進学を希望していることを条件に被調査者を選出し、被調査者と筆者である母語話者の初対面における会話の録音と被調査者に対するフォローアップインタビューを分析している。被調査者による発話文及び母語話者による発話文を分析したところ、被調査者が使用する文末表現の型はA型・D型が多く、一部の被調査者を除き使用上の大きな個人差は見られなかったこと、B型の疑問の終助詞「か」や省略の意味でのG型は意識的に使用している一方で、A型及びD型は無意識的に使用していること、A型を除く文末表現の型の使用は、映像メディアの影響が強いことが明らかにされている。		
主 査 記 載 氏 名 ・ 印		實平 雅夫

第5章「調査Ⅲ(a)：『文末表現』に対する『誤用評価』」では、誤用評価と印象評価の得点の相関関係、訂正すべき誤用だと感じられる表現の要因と特徴が検討されている。調査・分析の結果、以下の点が明らかにされている。まず、誤用評価と印象評価の得点の相関関係について、誤用評価と印象評価の結果に対して相関分析を行ったところ、両者の得点には相関が認められなかった。また、訂正すべき誤用だと感じられる表現の要因と特徴について、母語話者のフォローアップインタビューの内容をもとに質的に分析した結果、評価者が誤用であると評価した要因が、語彙の選択、接続、時制、アスペクト、助詞、文脈と表現のずれ、活用、語順、複合型に分類されている。その中で、高い誤用評価が付けられた要因は、語彙の選択、接続、文脈と表現のずれとされている。助詞や語順等、文末表現の枠組みから外れる指摘も多く、母語話者の文末表現の捉え方がより広範囲であることが明らかにされている。

第6章「調査Ⅲ(b)：『文末表現』に対する『印象評価』」では、マイナス印象を抱く表現の要因と特徴、誤用評価と印象評価の要因の関わりについて検討されている。調査・分析の結果、以下の点が明らかにされている。マイナス印象を抱く表現の要因と特徴について、母語話者のフォローアップインタビューの内容をもとに質的に分析を行った結果、評価者がマイナス印象を抱いた要因が、丁寧さの欠如、文脈と表現のずれ、意味のわかりにくさ、複合型に分類されている。この中で、最もマイナス印象が抱かれる要因は、丁寧さの欠如であった。イントネーションの不自然さに関する指摘は複合型に見られたものの、少数であった。さらに、各要因における表現の例が精査され提示されている。また、誤用評価と印象評価の要因の関わりについて、誤用評価、印象評価ともに、文脈と表現のずれが要因として指摘されている。特に、終助詞は発話文全体を最終的に決定付けるため、誤用や不使用による違和感があった場合は、マイナス印象に直結しやすいことが明らかにされている。また、印象評価の要因、丁寧さの欠如に関しては、スピーチレベルが下がる語の使用に留意が必要であることが明らかにされている。意味のわかりにくさによるマイナス印象は、語彙の選択、接続、語順の誤用と繋がりがあった。語の選択は自動詞・他動詞の誤用、接続は引用表現の不使用、語順は規範文法から逸脱したことで、主語・目的語・述語が不明瞭になり、そのことがマイナス印象に繋がっている。第5章及び第6章の結果から、文末表現の誤用とマイナス印象との関連性は低いものの、評価者は誤用評価においても印象評価においても文脈と表現のずれに注目する傾向があることが明らかにされている。

第7章「結論」では、2～6章での考察をまとめ、今後の課題を示している。

本論文は、「終助詞等の文末表現を間違えると相手に不快な印象を与える」と先行研究で指摘されつつも、これらの指摘は研究者の言語感覚に頼っているのが現状である中で、新たな試みとして母語話者評価を取り入れ、誤用だと捉えやすい表現やマイナス印象を抱かれやすい表現を明らかにしている。研究対象の広さ故、全体として考察が調査結果の分析の範囲にとどまっており、その調査事実のよってきた根拠を問うまでに至っていないこと、検討に際して用いられたデータの範囲、量がともに十分なものとは言えないことなど、今後に残された課題は多いが、学習者が目標とする日本語能力や運用場面、今置かれている発話場面に合わせて学習者自身が表現形式を取捨選択できるような自律学習を目指した日本語教育の可能性を相当に明らかにし得たことは、大いに評価することができる。

以上のことから、本審査委員会は全員一致で、論文提出者・木曾美耶子が博士（学術）を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	實平 雅夫	副 査	教授	高梨 信乃
副 査	教授	鈴木 義和	副 査	准教授	黒田 千晴
副 査	教授	リチャード ハリソン			